

I. ボーゲル：『ふたりのひみつ』（掛川恭子訳）

「きんさんぎんさん」のきんさん（成田きんさん）が亡くなったときのことで、お二人が国民的アイドルになっていたせいもあって、テレビ、新聞で大きく報道されました。お昼のワイドショーでもかなりの時間を割いて報じていたので、「きんさんぎんさん」はこれほどまで人々に愛されていたのかと神妙な気分になりました。僕たちふたごに対する社会的イメージの向上に本当に貢献して下さったのだなあと感謝の気持ちで一杯でした。でも、痛ましいのはぎんさん（蟹江ぎんさん）です。気丈にも「片身をもがれたみたいだがね」とインタビューに答えていましたが、静かにしておいてあげたいというのが正直な感想でした。

実は、「きんさんぎんさん」は106歳のとき、つまり1998年9月に当時95歳だった「つるさんかめさん」（小原鶴之助さん、西小路亀次郎さん）と京都で、合わせて402歳のトークショーをして人々を喜ばせました。その年下の「つるさんかめさん」が、きんさんが亡くなる前年、あいついで亡くなっています。小原さんのあとを追う様に一ヶ月も経たないうちに、西小路さんも亡くなりました。これは、ふたごは同じ運命にあるということではなく、むしろ対偶者を失ったときの悲しみの大きさを表しているケースといった方がいいような気がします。実際、精神的なストレスを計量化できるテストを実施した研究者がいて、ふたごの対偶者を亡くす心的ストレスは、自分の母親や妻を失うよりもかなり大きいことを報告しています。

そういった関連で今回は、対偶者の死を正面から扱った子ども向き（小学校中・上級年）の本を紹介いたします。それは、イルズ＝マーグレット・ボーゲル（ドイツ語読みでは、イルゼ＝マルグレート・フォーゲル）の『ふたりのひみつ』です。ボーゲルは、ドイツ生まれで、ドイツとスイスで学んだ後アメリカに渡った児童文学の作家で、挿し絵も自分で描いています（本書の挿し絵も彼女のもので、そして、なんと柔らかで愛情のこもった絵でしょうか）。もちろん、子どもたちに死一般を理解するきっかけとなるような傑作なのですが、彼女自身がふたごであることから、ふたごに対するまなざしの暖かさと理解の深さも作品から本当によく伝わってきます。

主人公である「わたし」、つまりふたごのインゲは一卵双生児の妹です。30分遅れでこの世に生まれてきただけなのに、「家じゅう一のチビちゃん」と呼ばれます。実際30分しか違わないのに、姉のエリカは色々インゲに指図をします。また、生まれてきたのが6月4日の11時45分と六がつ5日の12時15分であったので、エリカは30分ではなく、自分はインゲより一日分お姉ちゃんなのだとも主張します。

二人には隣に仲良しの友だちマグダがいます。インゲはエリカに邪魔されずにマグダと二人きりで遊びたいと思います。あるときそうしたチャンスが訪れます。美しい金髪のお気に入りのお人形フリーダを貸してあげながらエリカ抜きで遊べるチャンスです。でも、その幸せな時間は長く続きませんでした。気がつくと、エリカが目の前に立っていたのです。そこでインゲは思わず叫んでしまいます。「エリカ、あんたなんか、死んじゃえばいいのに！」と。

何から何まで指図するようにインゲには思われたエリカですが、実はとても妹おもしろいでもあります。二人で秘密の家を作ったとき、インゲにさんざん手伝わせておいてその家を最初は「二人の家」ではなく、「エリカの家」と名付け、そう書いた看板も取り付けてしまいます。でも、誕生日の日、エ

リカはいやがるインゲを無理矢理に秘密の家まで引っ張って行って、「インゲの家」と書かれた看板を見せるのです。これからはずっと「インゲの家」でいいというのです。二人は意地悪をし合ったり、お互いに頭に來たりしても、やはり仲のいいふたごの姉妹なのです。「わたしがエリカのとなりにすわると、エリカはわたしの手をとりました。きょうだいがいるのって、ほんとうにすてきです。とくに、チョウチョウをいっしょにながめられる、小川が流れていくのや、リスがはねまわるのをいっしょにながめられる、小鳥や草や野の花をいっしょにながめられる、ふたごのきょうだいがいるのって。ふたりいっしょだと思えるのって、ほんとうにしあわせでした。」

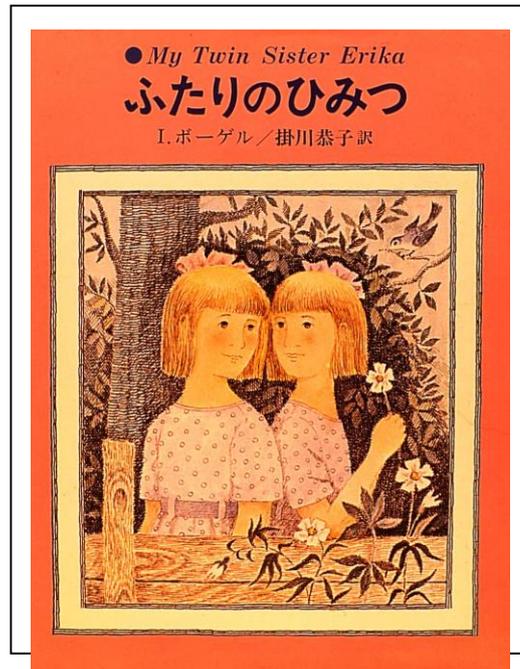
ところが、このエリカがハイキングの後病気になって死んでしまいます。すると「なにもかもがかわってしまい」ます。あれほど独り占めしたかったマグダですが、独り占めしてもなんだか旨く行きません。そのうち、一人で遊ぶようになってしまいました。また、人形も人形用の乳母車も全部「わたしのもの」になりますが、全然面白くありません。昔、二人で片一方ずつの手をもってお散歩させていたお人形は、今では片手でもっているのだから「だらりとぶらさがっています」。そうすると、突然エリカのベットのそばに座っていたくなります。「エリカ、あなたのことを考えていたいの、ほんとうに考えていたいのよ」。

インゲは、エリカが死んだ原因に自分が関与しているのではと不安に思っていました。それは、「エリカ、あんたなんか、死んじゃえばいいのに！」と言ってしまったからです。お祈りや良い言葉に何らかの力があるとすれば、悪い言葉にも力があるのではと思われたのです。母親はこのインゲの心配を察知して、インゲも同じことを言ったことがあると教えてくれます。するとインゲは、エリカは本気でそんなことを言ったはずがないとエリカをかばいます。母親は、「あなただってそうでしょ」と即答してくれます。インゲは、時にはエリカを憎らしいと思ったこともありましたが、本当はエリカが大好きだったのです。インゲにはこうしてエリカが死んだのが自分のせいではないことが分かりました。

インゲは、この後母親が一番悲しがっていることに気づき、母親を助けようと思立ちます。そうして次の日、彼女は自分の色とエリカの色、つまり青と赤のリボンを両方とも髪に付けます。

心理学者の河合隼雄先生は、『子どもの本を読む』（楡出版）の中でこの作品を扱っています。先生は、この物語を自己の中にあるもう一人の自分との葛藤の物語、つまり自我形成の物語と解釈しています。もちろん、この一般化は成り立つのですが、むしろ単純に、ふたごの姉妹間の葛藤と死による別れ・悲しみの克服の物語と読むことも自然な読み方だと思います。僕も、しょっちゅう喧嘩をしたり、相手を疎ましく思ったことも多いのですが、相棒が死んだらどうなるのだろうと非常に心細くなることがあります。インゲが自分は本当にエリカが好きだったのだと確認したように、自分にとって対偶者が大切な存在、愛する存在だと認識することが、その死を受け入れる大前提のような気がします。そして、インゲの母親やおじさん、おばあちゃんのように、その気持ちを理解し、やさしく見守ってくれる存在が周りにいることも大きな力になるでしょう。ですから、僕は妻や子どもたちにふたごの相棒のことを良く話しますし、またふたごであることの気持ちをもなるべく伝えるようにしています。また、実際に相手を失った場合には、自分自身でも、また周りの者たちも、相手のことを語り続けるようにしたいと考えています。もちろん、逆の場合もあるでしょうから、その時は僕のことを弟やみんなに語ってもらいたいと思っています。

また、ボーゲルにはエリカを失って6週間後のインゲを扱った続編、『さよなら わたしのおにいちゃん』（あかね書房、1982年）があります。新しくできた「おにいちゃん」を巡る母親との葛藤と和解が語られています。



I. ボーゲル：『ふたりのひみつ』書影

I. ボーゲル：『ふたりのひみつ』（掛川恭子訳）あかね書房、1978年。
『さよなら わたしのおにいちゃん』あかね書房、1982年。

『ツインズ』33号（ビネバル出版）から転載・修正